

虛弱兒童の鑑定

伊藤醫學博士談

兒童身體の虛弱であるか強壯であるかを檢するに
は通常胸圍、身長、體重等の大小に因つて定めま
すが、併し此等三者の關係により必ずしも標準とし
難い事が御座います、即ち身體の大小は人種によ
り遺傳的素質によりて相違がある又三者中の或者
は標準以上に發育して居ても或者が標準以下に在
るなどで一概に決し難い場合が多くあるのです、
今此等の標準と其相互の關係等に就いて少し御話
して見たいと思ひます▲先づ第一に胸圍の方から
申しますと、胸圍と身長との關係は初生兒は胸圍
が身長の三分の二位ありて其から段々身長が延び
るに連れて二分の一以下になります、舊來では胸
圍が身長を二分の一以上なければ強壯と云へない
と云ふ事に成つて居ましたが其は大人に於て云ふ
べき事で、小児の胸圍は身長を二分の一迄は無い
ものです、其で此に簡單なる鑑定法を申します

と、第一初生兒は頭の周圍が胸圍よりも大ですが
段々一年五六ヶ月位になると胸圍の方が大きくな
るものです、即ち胸圍が頭の周圍より大であつた
だら先づ強壯と見られるのです、次に右と左との
助骨の中間即ち「溝落」の所が銳角(三十度位)にな
つて居るのは其胸圍が狭小なので潤大なのは鈍角
に開いて居なくてはなりません、第三に身長の大
なる割に體重の軽いのは胸圍の狭小なる證據にな
ります▲此等胸圍の狭小なのは即ち肺の活量が
少いと云ふ證據であつて呼吸器病例へば肺病など
に罹り易い素質があると云つてよいのです、活量
計と云ふものがあつて息を吐き込むのは彼は遣り
方に大變巧拙がありますから餘り當にはなりません
ん▲次に胸圍が狭小でなくして尙活量の少いのが
あります、其は胸廓の形に依るので其一は「漏斗
胸」と云つて中央が凹んで漏斗の様になつて居
ます其二は胸骨の左右が落ちて中部が凸出して居
るので之を「鳩胸」と申します、第三は「帶溝」と申
しまして胸の中央よりや下部が横に溝を成して併
居て一見帶を締めた痕跡の様に見えるのですが併

し實は帶の痕跡ではないのです、第四は「尙僂病」と云つて骨の軟かな病氣ですが、其が爲めに各肋骨の中部が肥大隆起し胸の左右に珠數を垂れな様に連なつて居ます、之を「尙僂病的念珠」と云ひます此病氣は「富山縣の奇病」と云つて有名ですが必しも富山縣下には限りません▲前に頭の大ざと胸の周圍の比較の事を申しましたが頭が例外に大いのは其は別です、其大きいのは二様ありますが一は腦水質と云つて腦に水分を含んだので所謂「腦助頭」です、此種の頭を持つて居る者は通常暗愚な者です、すが中には却つて伶俐な者があります、頼朝などが即ち其方せう、二は例の尙僂病の爲めに頭が大いので四個の頭骨が皆肥大して頭が四角形になつて居ます而して四個の頭骨が隆起した爲め頂體に十字形を劃して凹んで居ます、之を「尙僂病性十字頭」或は「四角頭」など、申します、而して之は唯骨のみの病氣でなく體質に屬する病氣ですから身體全體が弱いのです

次に身長に就て申しますと、身長が標準以上に大であつても胸圍と體重とが之に伴はないで小であ

る時は尙虛弱となるのです、然るに身長短かいのに二種あつて、其内胸は人並にあつて唯手足のみ短いのは強弱に關係しません、是は智力にも障礙なく随分高位高官に在る人で此種の人もある者です、但尙僂病の爲めに手足の短いのは不可せんに又二種あつて一は年を取つても尙身體容貌智力共皆幼年者の通りであり一は身體のみ小さくて容貌は年と共に増せて居ますが此等は共に不可せんと▲次には體重の事に就て申しますが、體重が標準より著しく大なる時は却つて弱體なのであります、即ち脂肪過多症の爲めに肥滿して居るのや又病氣の爲めに腫れるのなどが此部類です▲此に精密なる圖があります、西洋東洋共兒童十一歳迄は身長も體重も共に男の方が勝つて居ますが十一歳から十五歳迄は女の方が發育し勝ち更に十五歳以後は再び男の方が勝つと云ふのが普通です▲更に男女初生兒の時から十五歳に至る各年齢の身長一仙米突に對する體重の標準、瓦は左の通りです

▲男女身長一仙米突に對する

體重の標準瓦

生時	男	女	男	女
滿一年	三三瓦	二五瓦	一六瓦	一六瓦
二一年	三三瓦	二七瓦	一七瓦	一七瓦
三一年	三三瓦	二七瓦	一八瓦	一八瓦
四一年	三三瓦	二七瓦	一九瓦	一九瓦
五一年	三三瓦	二七瓦	二〇瓦	二〇瓦
六一年	三三瓦	二七瓦	二一瓦	二一瓦
七一年	三三瓦	二七瓦	二二瓦	二二瓦

以上は凡て體格に就いて申しましたが更に體質に就いて申しますと、胸圍、身長、體重共標準以上にあるならば必ず強壯と云へるがと申しますのに必しもさうと限りません、即ち體質の如何に依つて虚弱と鑑定せざるを得ないのがあります、然るに體質の事は一寸素人に分り兼ねる事が多いのです、此に素人にも分る、即ち肉眼で見ただけで容易に鑑定の出来る事を二三條條述べて見ませう、先づ皮膚に就いて申しますと乾燥であつてはならぬ、多少の潤氣があつて光澤がなくはなりません、次に貧血であつてはなりません、次に一定の緊張があつて固くなくてはなりません、軟

かいのは不可ません、但女は多少柔かいのは已むを得ません、次に強壯者は皮膚に毛がなく、在つても甚だ薄いのです、尤胸毛などは別ですが、背中の上部や兩腕の外部に面した方に一帶の長い毛が生へて居るのは多くは虚弱病質の徴候です、勿論除外例は凡ての原則に伴ふものですが私が實驗しました範圍では先づ例外は無かつたのです、次に口に就いて申しますと、齶齒の齶齒は別に強弱の徴候になりませんが、齒の生へ替らないう前、即ち幼稚園時代の上齒の四枚（就中央の二枚）が根元の方から腐蝕して終には齒莖の所から折れて齒の根ばかり残るのは不可ません、是亦多くは腺病質です、其から齒の尖端の方から中凹みに腐蝕するのは遺傳性微毒質だと申しますが、是は必しもさうと限らぬ様ですが、併し少くとも不健康の徴候とは見られます、次に眠つた時に口を開いて鼾聲を漏すのは扁桃腺肥大の症候で之が慢性的になつて居るのは同じく腺病質の徴候です、耳下腺の少しの肥大は小學兒童には先づ普通で巨細に檢すれば腫れてない者が先づ十分の一以下位し

かありませんが、顎下腺の少しく大きく（少くとも銀杏大以上に）肥大して且つ固いのはやはり腺病質の徴候です

子供の感冒豫防

瀨川醫學博士談

▲朝夕の外出は禁物 近頃大分小児の氣管支病に罹る者が多くなつたが既に罹つた者は手後れせぬやう醫療を受くるが肝腎であるし一般家庭の注意としては感冒に罹らぬ豫防手當が何寄の必要である生後五六ヶ月位の幼兒ならば戸外に出さず置くがよろしい二三歳から六七歳に至る小兒でも朝早くと夕景頃から外出は禁物である夏時ならば兎も角も此寒い冬空に朝の空氣が藥になるなど云つて六七時乃至八九時頃の冷たい空氣に當るのには却つて毒となる總じて日本作りの建物は通氣の工合が良いから故らに幼兒を戸外に負ひ出すには及ばない七八歳の健全な小兒でも午前の十一時か

午後二時に至る暖かい時間を除く前後は外無用である

▲衣服寝具等の注意 何でも澤山に重ね着さすのが小兒の爲めになると心得て襦袢に綿入の三四枚

を着せて其の上に股引を穿かせ襟巻をさせると云ふ風は強ち珍らしくない甚だしいのは寝かして置く時迄が矢張り股引綿入に身を包んで其れが小兒

の爲めに親切であると思つて居る父母もある吾輩の家では小兒の日中着は襦袢一枚綿入二枚とし寒

い時には綿入羽織を重ねて遣り寝衣としては冬はフランネルの襦袢一枚夏は木綿の單衣一枚と決め

てある一體東京附近の氣候では小兒に襟巻襦袢、股引等の必要はない寝衣を二枚も三枚も纏はせて

厚い重い夜具の中に寝かすのは安眠にも害になり夜中蒲團を轉げ出す虞れもあつて却て感冒に罹ら

せる機會を作ることがある寝衣も夜具も成る可い暖い身軽い物を用ゐて小兒の安眠に便するが好

い夜間股引足袋の儘に寝かして置くが如きは以て

の外なる誤りである未だ負はれて居る小兒などは

餘り餘計に着物を着せてある爲め下ろして負着半